

編集室



明けましておめでとうございます。

今年もどうぞよろしく願いいたします。

また、平素より「水産宮崎」をご覧いただき、誠にありがとうございます。

昨年8月号より「水産宮崎」の担当となり、多くの方々の協力を得て今年も新年号にたどり着くことができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

さて、昨年社会情勢を顧みますと、中国・武漢より発生した新型コロナウイルス感染症が瞬く間に世界中に蔓延し、未だ終息の兆しが見えていない状態です。国内でも、東京オリンピックの延期や甲子園などの恒例行事が延期や中止となり、今までの常識が一変した年でした。私たちの生活も新型コロナウイルス感染防止の観点より、3密を避ける為のテレワークの導入やアルコール消毒、マスク着用などといった衛生管理の徹底などの新たな生活様式が定着しつつあります。

また、その他では、将棋の藤井棋聖が最年少で二冠に輝いたことや、社会現象となった「鬼滅の刃」が興行収入歴代2位まで上り詰め、コロナ禍で滞っている経済を回す潤滑剤となるなど、新たな波が自粛ムードで暗い日本を盛り上げてくれました。

一方、水産業界を振り返りますと、新型コロナウイルスの影響により全国的なイベントが中止、延期され、外国人技能実習生の入出国の制限は幾分緩和されたものの、厳しい状態が続いております。また、本県の沿岸漁業においても、新型コロナウイルスの影響に係る魚価の低迷こそあったものの、イワシの豊漁により旋網漁業の水揚げ量は右肩上がりとなり、さらに、昨年度歴史的な不漁となったカツオー一本釣り船のビンチョウマグロが今年度は豊漁となるなど、明るい話題もあった一年となりました。

そのような状況の中、我々業界に必要なことは、漁業を守り、漁業を継承していくという観点から、多くの方へ魚や漁業について関心を持ってもらえるよう情報発信を行い、改めて魚食文化に気付いて頂くことで魚離れを少しでも防ぐことが重要ではないかと考えます。

県内を取り巻く環境が、漁業収益の減少や後継者不足等益々厳しい状況にあり、この「水産宮崎」が、漁業者の事業、生活の改善に繋がるよう、関係者の皆様が情報共有していただくツールとして、本年も引き続き紙面作りに精進して参ります。

結びになりますが、今年1年が皆様にとって、実り多き年になりますようご祈念し、私の挨拶とさせていただきます。

